

永平廣錄研究の序説

神保如天

永平廣錄研究の序説

神 保 如 天

一 緒 言

永平道元禪師が大宋國から歸朝せられた安貞元年丁亥（皇紀一八八七）の二十八歳から、入滅の建長五年癸丑（一九一三）の五十四歳に至る、前後二十七年間に撰述せられた著書は、大小三十六部百五十一卷の多きに上る。就中、最も大部のものは永平正法眼藏の一部九十五卷であつて、其の次に位するものは永平廣錄の十卷である。前者は假名書きの和文であり、後者は全體が漢文で其の中に散文のものも相當あるが韻文のものも可なり多い。古來、正法眼藏に就いては多數の學者が輩出して、有らゆる方面から之を研究して數十種の著述が世に出てゐる。然るに永平廣錄に至つては其の研究者極めて少く、著書の如きも僅に二三を算ふるに過ぎない。

此の點甚だ遺憾と言はざるを得ない。其の然る所以を考ふるに、和文に比して漢文は一見して難解であるが如き感を與ふることも其の一であらうが、正法眼藏の研究に餘り精力を傾倒し過ぎた結果、永平廣録を顧みるに暇の無かつたことも其の理由の大なるもの、一ではあるまいかと思ふ。従來は兎も角として永平高祖滅後、將に七百年に垂んとするの時、尙ほ未だ永平廣録に對して其の宗旨を開顯せず、其の玄風を發揚せざるが如きは永平の兒孫として、果して高祖に辜負するところが無いであらうか。正法眼藏は固より正法眼藏にして高祖の煖皮肉たることに何等異存はないけれども、永平廣録は正に永平廣録にして永平の活骨髓である。然るに一を取つて一を顧みないといふことは孝子順孫たるものゝとるべき態度ではあるまい。今後大いに永平廣録研究者の輩出を待望して止まない。筆者は永平廣録研究の一端として、此の一小論文を纏めて、今後續出する學者の先驅であり度いと思ふ。

二 永平廣録の編集年代

永平廣録の編集年代に就いては寛文十二年壬子（二二三三二）八月、中山道白和尚の序に依れば、

興聖永平二會說法、中華扶桑兩地吐演、門人編集謂之廣録。凡若萬千言共爲二十卷也。大師滅後、其徒義尹持此廣録遠入宋地、就瑞巖遠需爲校正。需之遠公者蓋以下其與大師同出於天童淨老也。遠公好略拔出百千之十一集爲一卷作序作跋云々。

とある。此の序文中には年號は記載して無いが、寒巖義尹之を宋地に携へ、瑞巖の義遠に校正を需めたといひ、又義遠が略録を集めて一卷とし之に序を作り跋を作つたといふ。其の序文中には

日本元公禪師、截^リ海^ヲ南^ニ來^ル、直^ニ入^ル其^ノ室^ニ。向^テ心^ノ塵^ヲ脫^ス略^ノ處^ニ、喪^ニ盡^ス生^ノ涯^ヲ。歸^ニ坐^シ故^ノ山^ニ、盡^レ情^ヲ訢^ル露^ス。其徒義尹、採^ニ撫^ル狐^ノ涎^ヲ、欲^ス爲^ニ序^ヲ引^ク云^々。

景定甲子十一月旦 無外義遠書

と記してある。景定甲子は其の五年、我が國の文永元年甲子（一九二四）で、道元禪師滅後十二年に丁る。遠公の序跋の外に、義尹は靈隱の退耕源寧、淨慈の虛堂智愚の兩人の跋文をも得て歸つた。その兩者ともに大宋乙丑咸淳改元春としてある。咸淳元年は景定六年に改元したもので我が文永二年乙丑であるから、義遠の序の翌年である。

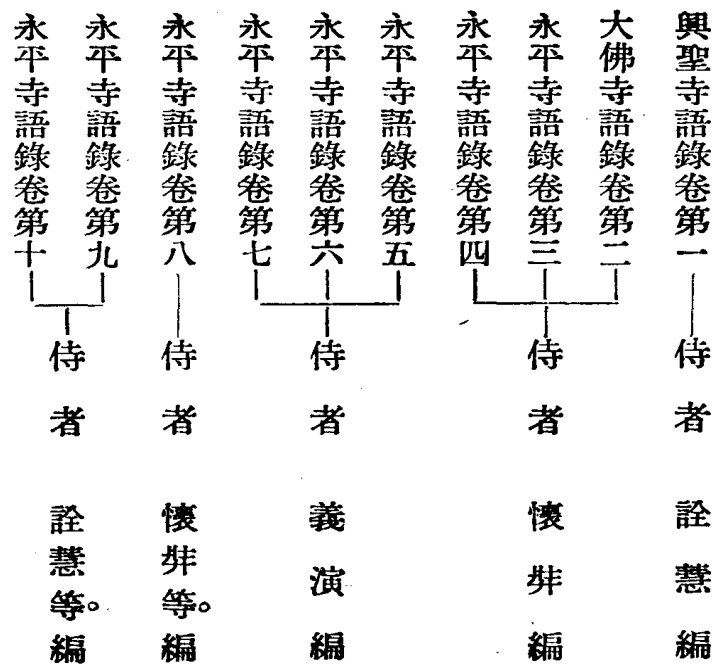
次に寒巖義尹の入宋の年代を一應調べて見よう。日域洞上諸祖傳卷之上の大慈寺寒巖義尹禪師傳に依ると、師諱義尹、字寒巖、顯德帝第三子、母贈左大臣範季之女也。建保五年^ニ誕^ル矣。（中略）年二十七^ニ航^シ海^ヲ入^リ宋、參^ニ見^ス太白^ノ長^ノ翁^ヲ和^シ尙^ニ。翁一見^シ特^ニ加^フ器^ヲ重^ク。未^ル究^ニ奔^ラ馳^テ、損^ル友^ヲ促^ス還^ル。厥^レ後^ニ至^リ文^ノ永^ノ元^ノ年^ニ重^テ入^リ宋^ノ域^ニ、首^ニ謁^シ無^レ外^ニ於^テ瑞^ノ巖^ニ、繼^テ見^テ退^リ耕^ヲ於^テ靈^ノ隱^ニ、參^ス虛^ノ堂^ヲ於^テ淨^ノ慈^ニ。各^ニ有^リ機^ノ緣^ヲ、咸^ニ敬^ス異^ニ之^ヲ。將^ニ且^ニ徧^ク禮^シ祖^ノ塔^ヲ、浮^ニ遊^ス名^ノ山^ニ。大宋咸淳三年^ニ駕^シ商^ノ舶^ヲ歸^リ國^ニ。乃^ニ至^リ、正安二年庚子八月二十一日、淨髮澡浴、索^テ筆^ヲ書^キ偈^ヲ曰、八十四年、動^ニ靜^ヲ得^テ禪^ヲ、末^ニ後^ニ一句、威^ノ音^ヲ已^テ前^ニ。置^テ筆^ヲ而^シ化^ス。

とある。義尹は建保五年丁丑（一八七七）に生れた。此の年は永平高祖は十八歳で建仁寺在住時代である。而して其の入寂は正安二年庚子（一九六〇）八月廿一日、八十四歳であつたといふ。これは高祖滅後四十八年目にあたる。廿七歳で入宋して太白長翁和尚に參見したとあるけれども義尹の廿七歳は寛元元年癸卯（一九〇三）であつて、太白長翁和尚即ち天童如淨禪師の此の世に存する筈が無い。天童淨祖は高祖歸朝の翌年、宋の紹定元年七月十七日、我が安貞二年戊子（一八八八）に入寂してゐる。これは大なる誤である。その後文永元年甲子（一九二四）四十七歳の時再び入宋した。無外義遠の序文を其の年の十一月に得たといふのと全く符合してゐる。咸淳三年に歸朝したとあるから、咸淳元年に退耕及び虚堂の跋文を得たといふことも能く符合する。義尹の傳記中には永平の廣録を携へて宋に入つたといふことは見へないが、義遠、退耕、虚堂の三人ともに義尹が元和尙廣録を將來したと云つてゐるからして此の點は毫も疑ふ餘地が無い。

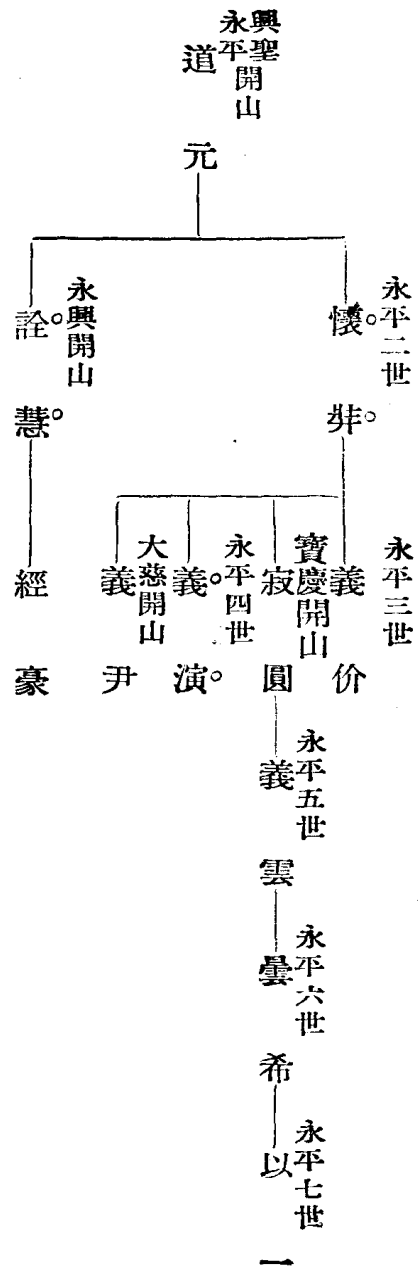
以上、序文、跋文、及び義尹の傳記に依つて考ふるに、文永元年に永平廣録十卷を尹公が携へて入宋したことが明白となつた。さうすると此の永平廣録は高祖滅後十一年間、即ち建長五年以後弘長三年癸亥（一九二三）の間に編集せられたものであると斷定してよろしい譯である。卍山和尚の序に記するところも大體此の意味に解してよからうと思ふ。

三 永平廣録の編集者

永平廣錄十卷の編集者は各卷首に記すところに依れば侍者詮慧、懷井、義演の三人である。之を表示すれば左の如くである。



この三人の内、詮慧、懷井の二人は高祖の直弟子であるが、義演は懷井の弟子であつて高祖の孫弟子にあたる。



詮慧和尚の傳記は日域洞上諸祖傳卷之上に永興寺詮慧禪師傳とあるけれども只首めに、「師名詮慧、江州源氏之子也」といふだけが世傳であつて其の他のことは一向記載して無い。されば道元禪師の門に初めて投じたのは何時であるかは不明であるが、その傳の中に左の如き文がある。

聞頃有道元傳禪旨於異域而歸。未審彼明何等事來。乃出到深草。偶逢元上堂。師傍立竊聽。元舉
 「有入道得一句法界量滅。乃至天邊玉兔自眠。而脫然信服。便誓更衣侍巾瓶。元乃爲聽許云々。」

深草に到つて道元禪師の上堂に逢うたといふところを見ると興聖寺建立以後のことである。正法眼藏摩訶般若の卷が天福元年癸巳（一八九三）夏安居日始めて興聖寺で示衆されてゐる。それより後四年、嘉禎二年丙申（一八九六）十月十五日に興聖寺で始めて祝國開堂のあつたことは興聖寺語錄卷第一の最初に出てゐる。果せる哉、詮慧が立聽したといふ「有入道得一句法界量滅」云々の上堂の語は、此の興聖寺語錄卷

第一の第三回目の上堂の語に出てる。筆者は此の第三回目の上堂を嘉禎三年頃と推定してゐる。さうすると詮慧和尚の高祖に投じたのは嘉禎三年といふことになる。嘉禎三年は道元禪師三十七歳の時である。詮慧の齡は不明であるが、「幼而剃染於横川」といひ「學通顯密之宗要、議論以蓋人也」とあるところから察すると天台宗の所謂新進氣鋭の學者であつたらしく思はれる。故に若くても廿歳以上三十歳前後にはなつてゐたであらう。

懷井和尚も日域洞上諸祖傳卷之上に詳しく其の傳が述べてある。

以建久九年生藤氏。(中略)年二十一登壇受具。(中略)謁覺晏師聞見性成佛之旨。(中略)時道元禪師歸國寓洛之建仁。師往見之。於元公言下知有機不發。禮拜而遊諸方。文曆甲午冬再參元公於深草。愈見牆仞之高而易服親炙焉。元公容爲三侍者。其翌年秋八月望受菩薩戒。(中略)建長癸丑秋七月十四日元讓法席。師開堂演法。(中略)遂溘然而寂。時弘安三年八月二十四日也。世壽八十三。僧臘六十有三云々。

懷井は高祖の生誕より二年前の建久九年戊午(一八五八)に生れ、高祖滅後二十八年の弘安三年庚辰(一九四〇)八十三歳で入寂した。井公の覺晏門下より衣を易へて高祖に投じたのは文曆元年甲午(一八九四)で二歳年少の高祖に三十七歳で以て歸投したことになる。されば懷井は詮慧よりも恐らく二、三年早く高祖の門に入つたであらうと思ふ。

懷井が高祖の侍者であつたことは傳記既に之を載せてゐる。嘉禎四年に示された「一顆明珠」の卷を寛元二

年に吉峰寺で書寫したのにも侍者懷葬と明記し、寛元二年「摩訶般若」の卷を書寫して吉峰精舍侍者寮と記してあるなど、侍者としての懷葬の名が諸處に見られるのである。然し詮慧の侍者であつたことは古い記録には殆ど見當らない。徳川時代の明和六年己丑（二四二九）三月に萬仞道坦の書いた繕寫正法眼藏古鈔序の文中に懷葬侍者記鈔者名正法眼藏。詮慧侍者聞其法益錄椅子下者名聞書云々。

とあるのが特に目立つて見るのである。

次に義演の傳記は日本洞上聯燈錄卷第一に載つてゐる。それに依ると、

越前永平義演禪師未詳其本貫。受業於波著寺懷鑑。每以生死自策勵。鑑見其精勤甚鍾愛之。仁治二年鑑携師謁永平元禪師乃執弟子禮。蒙示捷徑有所警發。元滅後參孤雲。雲以本分。鉗錘重加煅煉。疑團爆然頓落。及永平虛席逼衆請進院開堂。爲孤雲之嗣。統衆嚴整法席孔熾。晚年間居報恩不復與世接。正和三年十月二十六日戢化。提唱不存。

もと波著寺懷鑑の弟子であつたのが仁治二年辛丑（一九〇一）高祖四十二歳興聖寺在住時代に弟子の禮を執つたので、永平寺とあるのは誤りである。それより十三年間も高祖に奉侍してゐた譯だが機縁未だ熟しなかつたと見へて高祖滅後孤雲懷葬の法を嗣ぎ、永平第四世の席を董し、終に正和三年甲寅（一九七四）十月廿六日に入寂したといふから、高祖滅後六十二年間も存命であつたのである。世壽は不明だが、高祖に奉侍した十三年を加へると七十四年になる。高祖に始めて投じた仁治二年は遅くとも二十歳前後であつたと見ねばならぬ。さ

うすると寂年は少くとも九十歳を越えてゐたであらう。侍者義演として永平廣録の編者に加へられたのはどういふ譯であらうか。

正法眼藏の最後の奥書に、

如今建長七年乙卯解制之前日令^ム義演^{ヨウエン}書記書寫^{シテ}畢^リ同一ニ校^セ之云々。

とある。高祖滅後三年の建長七年頃の義演は書記として最も適當であつたのだらう。侍者としては餘りにも若かつたやうに思はれるが、義演は能筆の技倆を有ち、常に侍者寮に在つて高祖の説示、法語等の類を淨寫し或は記録の役目を一手に引受けてゐたのかも知れない。其れが十年餘も續いたとすれば義演の功も與つて力があつたといはねばならぬ。斯うした意味からして其の多年の功勞に酬ひんが爲に侍者の榮譽が與へられ、永平廣録編集者の一人に加へられたのでは無からうかと思ふ。それで無くては侍者として此の編集者の一人に加はつた所以が解し得られないからである。

卷第一より卷第七までは興聖寺、大佛寺、永平寺の順に各時代別に上堂語が編集されてあるから侍者詮慧、懷井、義演と各一名づゝ單記にしてあるが、卷第八は小參、法語、卷第九は頌古九十則、卷第十は眞贊、自贊、偈頌等で、此の三卷は各時代を通ずるものが各卷に収録されてあるところからして、侍者懷井等、詮慧等と代表名を擧げて複記にしたものと思ふ。如何にも其の注意の周到なるには敬服に値ひする。

四 永平廣錄と永平語錄

永平廣錄といふ標題は編集の最初に命ぜられた名稱のやうである。卍山和尚の序文中に「門人編集謂之廣錄」といひ、「義尹持此廣錄遠入宋地」といふ。又義遠の跋文にも「義尹禪人不志乃師之志持其廣錄需爲較正」とあるので明白である。此の意味から觀て虛堂の跋に「尹上人持日本元和尙永平集來」といひ、「元老則有超師之作、覽斯錄二者從而魯變」とあるのも同一廣錄の意に解して差支なからう。

次に永平語錄といふ標題のことである。永平語錄は義尹が入宋の際に永平廣錄を携へて行き無外義遠に較正を求めたところ、其の廣錄中から約十分の一を抜抄して序跋を附したといふ本の名である。そのことは義遠の跋文に、

義尹禪人不志乃師之志、持其廣錄而需爲較正、得百千之十一。其權實照用、敲唱激揚、具此錄中、猶海之一滴耳。

といつてあるので明らかである。此の意を承けて卍山和尚の寛文十二年の序文に、

大師滅後其徒義尹持此廣錄遠入宋地、就瑞巖遠需爲較正。需之遠公者蓋以下其與大師同出於天童淨老也。遠公好略拔卍出百千之十一集爲一卷、作序作跋。跋之中曰、大海汪洋、渺無涯涘、嘗一滴則百川異流、具此滴中矣。靈隱寧公、淨慈愚公亦同跋焉。

とある。是れに由つて永平語録なるものは廣録中より百千が十一を拔出して義遠の手に依つて宋地に於いて集めて一卷とせられたことが明瞭である。故に之を廣録に對すれば略録と名くべきものである。然し義遠が此の廣録中から十分の一のものを抜抄した意味は、決して其の中から萃を抜いたとか義理の勝れたもののみを選抜したとかといふ意味ではない。謂はゆる大部の廣録では大海汪洋、渺として涯涘が無いからして海水の一滴を嘗めて以つて其の鹹味を味ひ得るの至便なるに如かずとして之を簡略にしたに過ぎないのであつて、略録のみが金玉の文字を連ね、其の他のものは重要で無いといつたやうな深淺殊劣を判釋した意味は毛頭存しない。卍山和尚の謂ふが如く、遠公は略を好んで百千が十一を抜き出して集めて一卷としたのである。然し略録を以つて大海の一滴を汲んで巨海の鹹味を知り得ると雖も、やはり廣録に依つて其の蘊崇の廣きと大海の汪洋を見聞するには如かずである。卍山和尚も、

我門之徒其機不_レ一^{ナラ}、有_二好_レ略者_一、有_二好_レ廣者_一。若存_レ略而無_レ廣則攝化不_レ普^{ネカラ}、蘊崇似_レ乏^{ヲリシキニ}。

と謂つてゐる。蓋し是れは至言である。然るに識者にして動ともすれば此の一卷の永平語録を以つて廣録中の萃を抜いたものであり永平語録中の根本的なものであるかの如くに思ひ、十卷の廣録は略録抜萃後の殘滓でもあるやうにいひ、甚だしきに至つては其の本質的價值までも疑はんとするが如き者のあることは慨歎に堪へざるところである。此れ等の誤れる識者は義遠の序跋、源寧、智愚等の略録跋文等を深く考究せざるに基く謬論といはねばならぬ。

此で序でに永平語録（略録）の持つ内容を付け加へて置き度い。最初に無外義遠の序文を載せ、冒めに

元禪師初住本京宇治縣興聖禪寺語録

侍者 詮慧 編

と記し、嘉禎二年丙申十月十五日祝聖罷の上堂語を第一とし都合二十二回の上堂語を擧げて、興聖寺上堂終と一段落を切り、次に

開關次住越州吉祥山永平寺語録

侍者 懷辨 編

とし、師於寛元二年甲辰十月十八日從于當山と前書して、以下上堂語五十三則を列ね、永平寺上堂終と第二の段落を切つてゐる。

次に○小參として、結夏、解夏、冬夜、除夜の四章、○法語として、示禪人の一文、○普勸坐禪儀 ○坐禪箴 ○自贊 三首、○偈頌十七首の後、永平元禪師語録終と書いて全篇を畢つてゐる。最後に義遠、源寧、智愚の跋文のあることは言ふまでもない。

五 永平語録の傳來並に出版

義尹和尚が南宋の咸淳三年、我が文永四年（一九二七）に、商船に駕して歸朝した時に、廣略二本を携へて歸つたに相違ない。此の年は道元禪師滅後十五年であつた。それより後九十二年目の○延文三年戊戌（二〇一八）に至つて永平語録即ち略録が開版せられてゐる。此の九十年間の傳來の歴史は全く不明である。其の延文

本の奥書に云く、

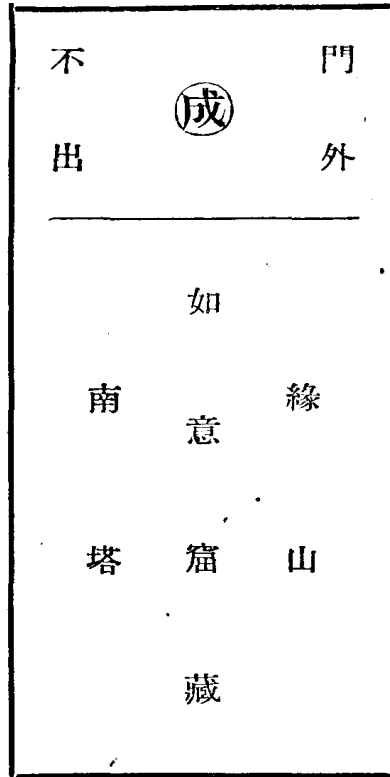
于時延文戊戌、受菩薩戒弟子、寶慶大檀越野州太守藤原朝臣知冬、發願助緣矣。所集鴻福、上報四恩下資三有者。

住持永平兼寶慶比丘曇希立版

開版奉行 比丘瑞雄維那

書 字 比丘以一首座

とある。曇希禪師は永平六世で、以一首座は其の法嗣であつて永平第七世を董してゐる（八頁の法系圖參詳）。施主は寶慶寺の大檀越で伊志良知冬である。學道用心集の初めて開版せられたのは延文二年丁酉（一〇一七）であつて此の略録より一年早い。その奥書も、只延文丁酉の干支の二字が異なるだけで、その他は略録の文と全く同じである。此の二書の奥書は曹洞宗の出版記録の文献としては最古のものであつて、それが何れも曇希禪師の發願立版であり、伊志良知冬公の助緣であることは宗門として永久に忘れてはならないところである。知冬公が寶慶寺の大檀越であるが故に特に永平兼寶慶と記されたのかも知れない。駒澤大學圖書館に此の延文本と覺しきものを一部藏してゐる。但し延文本の奥書以外に出版所及出版年月日等の文字は更に記してない。其の表紙に次の如き貼紙がある。



延文本の次にそれより二百七十四年後の寛永八年辛未（二二九一）謄寫の長護本がある。

○開闢本京宇治郡興聖禪寺語錄第一

侍者 詮慧 編

（尾）興聖禪寺語錄第一

上堂數三十四并頌古四十五首

于時寛永八辛未年冬日

大圓山心月寺現住瞻南和尚之代

任寫本燒香三拜謹書長護九拜

開闢越州吉祥山大佛寺語錄 第二

侍者 懷非 編

（尾）永平禪寺語錄第二卷之終

二卷分上堂五十九頌古十首

大圓山心月禪寺現住瞻南和尚之代

于峯寛永八辛未年稔冬日

任寫本焼香三拜而長護拜謹書

この様に二卷になつてゐて其の巻尾には右の如き詳細の奥書がついてゐる。大圓山心月寺は現今福井市玉井町に在る。瞻南は其の寺の十三世で瞻南吞佐和尚である。長護は其の弟子か或は會下の人であつたのだらう。瞻南和尚の命に依つて之を寫したものであることは此の記載に依つて明らかである。これが越前福井であるところを見れば永平寺若しくは寶慶寺にあつた原本を借り寫したものであらうと思ふ。其の點を一向明記してゐないのは甚だ遺憾である。

それより僅に十七年後の正保五年戊子（二三〇八）に第二回目の刊本が出た。

③ 永平元禪師語録

正保伍戊子孟春吉旦 林甚左衛門開版

とある。此の正保本を始めとして徳川時代に數種の出版がある。

④ 新版
頭書 永平元禪師語録

寛文十三季癸丑（二三三三） 孟冬穀旦

神雄拜 觀音寺書肆發行

⑤道元禪師語錄 附傳

(傳末)享保十五歲次庚戌(二三九〇)仲秋日

遠孫 神應寺古溪秀蓮撰

(卷尾)享保十六辛亥歲九月吉日敬誌

杉山藏版

取次所 京柳馬場通二條下町

芳野屋作十郎

⑥新元古佛錄 定盤星

峰老雋原餘二十七紙巖公擊節垂二十九紙雖目富意飽難收於鉢囊元文改元(二三九六)冬安居總之勝胤禪講餘力校離乎廣錄撮略乎雋擊間亦添糅以見聞所冀欲教衲子易見易識易受用是黑鈍子微意也

袈裟下顛預惡賊文盲坊主薩轟直

黑慢幢太淳誌

助緣 上報四恩下資三有 寶州首座

書字 爲受業師鐵門首座 比丘鐵鱗

東武駒籠 月岑藏版(卷尾)

此の本に始めて冠註が加へてある、故に参考書の一として數ふことも出来る。梅峰の雋原、徳巖の擊節が餘りに長きに失するから此の二者を撮略し間と見聞を加へたといふのは此の冠註のことである。元文元年に千葉の勝胤寺に冬安居した際に着手したといふのであるから出版はそれより數年後のことであらうが、其の年曆は記してゐない。雋原、擊節のことは後の参考書の項で述べる。今武藏の内に月岑寺(院)と稱する寺號は見當らない。

⑦ 較正 永平元禪師語錄
古版

(祖録題辭)寛保三年癸亥(二四〇三)六月十五日

遠孫若州吉祥林沙門面山瑞方謹題

(永平祖師年譜傷)享保二年丁酉(二三七七)八月二十八日

遠孫相州老梅庵沙門面山瑞方謹撰

延享元子歲(二四〇四)三月發行

京師書林 二條街 風月勝左衛門

六角通 小川多左衛門

永平廣錄研究の序説

製本所 六角通御幸町西エ入町

柳枝軒 小川多左衛門

此の本の扉には道元禪師の畫像を描き、永平初祖道元和尙像讚 永平五世兼寶慶義雲謹書といふ文字が掲げ
てある。義遠の序跋、源寧、智愚の跋文、延文本の奥書等を首尾に載せてあるところ如何にも面山和尙の出版
らしい意が用ひられてある。

以上挙げたものは大凡そ年代順に次序を追うて刊行され、普く世に流布せられたものである。而して何れも
皆今より二百年以上六百年前のもののみであつて、而もそれが何れも現存してゐるといふことは實に憚べき
ことといはねばならぬ。この外に近頃出版された活版のものには

- 一、永平元禪師語錄 國譯禪宗叢書卷八 大正九年 同叢書刊行會
- 二、永平元禪師語錄 曹洞宗全書宗源下 昭和五年 同全書刊行會
- 三、永平元禪師語錄 道元禪師語錄 合本
譯註 昭和十五年大久保道舟編 岩波書店

の三本がある。此の外にも或はあるかも知れないが、さしあたり筆者の手許に在るもののみを挙げたのである。

六 永平廣錄の傳來と開版

永平廣錄は永平語錄に比して傳來の歴史は餘り明らかで無い。義尹和尙が携へ歸つてから恐らく永平寺に之

を秘藏したであらうとは察せられるが其うした文献は別に遺つてはゐない。略録たる永平語録は僅に一巻にして丁數も三十枚前後であるから謄寫するにも、開版するにも比較的容易であつた。それに反して廣録は十卷といふ大部で携帶にも謄寫にも甚だ容易でなく、開版するには多くの助縁を得なくてはならぬといふ經濟的事情にも困難があつて、略録よりはすべてに於いて遅れたのは止むを得ないことである。寫本として今日知り得る最初のものは高祖滅後三百四十五年の慶長三年戊戌（二二五八）に、永平二十世門鶴禪師が宗椿をして書寫せしめたもので、現に日光輪王寺慈眼堂に所藏する本即ち是れである。察するに永平寺に原本を所藏してあつたのを門鶴禪師が謄寫せしめたのであらうとは想ふが、或は他に藏せしものを寫させのかも知れない。其の點何とも言明し難い。何れにしても永平寺に其の原本は無い。又謄寫せしめた本もどうした因縁か日光の輪王寺の所藏に歸してゐる。初めて出版されたのは慶長三年後七十五年、高祖滅後四百十九年の延寶元年癸丑（二二三三）である。寛文十二年（寛文十三年改元延寶）に書いた卍山和尚の序文跋文を見れば、如何に卍山和尚が此の校訂出版に苦心を嘗めたものであるか、窺はれる。

斯錄秘之古筐中。後代當之舊青氈。帙散簡斷微言將滅。（中略）我輩後生遠受大師。豈得如下視秦人之肥瘠。曾不加欣戚於其心哉。遂欲使工鏤板數年于茲。顧其爲書以展轉寫去。文多有脫誤。因廣求別本。每逢人正焉。今茲暇日再考錄中之顛末。粗加倭點。以付之梓人。要壽其惠命。而及無窮者。是我一片赤心腸也矣。（序）

師見ニ略録ニ則雖レ知ミ一滴具ニ全潮ニ更閱ニ大全ニ可ミ以親ニ波瀾、浩渺邊際、深廣ニ矣。嗚呼斯録有レ補ニ於法門、大師有レ功ニ於佛祖、其誰措ニ異論ニ耶。(跋)

此の序跋は寛文十二年であるが、奥附に依れば延寶元年仲秋吉旦とあり、其の出版は東京と西京との兩所に於いて行はれてゐる。東京は江戸室町三丁目戸嶋總兵衛彫刻とあり、西京は書肆洛陽二條通大恩寺町風月莊左衛門繡梓とある。只大いに異るところは、

皆延寶辛酉九年中和月十九觀音大士誕辰

黃檗晚學瑠木庵拜撰

と署名した木庵の序分が洛陽のものに有つて江戸の本には載つてゐないことである。前者は筆者十冊本を所藏し、後者は折居光輪師手澤の五冊本が駒大圖書館に藏されてゐる。木庵の序文が延寶九年辛酉(二三四一)であるから、延寶元年本に載る譯が無いのである。これは恐らく延寶元年に出版計畫は出來たが實際は延寶九年(此年改元天和)に至つて實際は出版されたものであらう。中山和尚は洛北鷹峰に在り、黃檗山との交際もあつたので木庵の序文を得ることの便宜を得たのであらう。江戸出版の本は確實に延寶元年版である。であるから京都出版のものは延寶元年本の重刊と見ても差支ないと思ふ。世に天和元年本といひ傳へられてゐるのは即ち此の京都版の永平廣録のことである。

同じ京師書林六角御幸街西え入小川多左衛門、柳枝軒發行と奥附して而も出版年月日を記さない五冊本の永

平廣錄がある。面山和尚の延享元年(一四〇四)に出版した較正永平元禪師語錄の奥附、製本所小川多左衛門と同じであるところより察すれば略々同時代に出版されたものではあるまいかと考へられる。

永平廣錄としては以上述べたところの刊本が廣く世に行はれてゐるのである。明治以後印刷術の發展に伴ひ活字本が盛んに普及せられるやうになり、永平廣錄を収録したものが多數現はれた。之を列擧すれば次の如きものがある。

- 一、永平廣錄 承陽大師聖教全集第三卷 明治四十二年弘津說三編 鴻 盟 社
 - 二、永平廣錄 日本大藏經宗典部
曹洞宗章疏一ノ内 大正四年同藏經編纂會
 - 三、永平廣錄 曹洞宗全書宗源 下 昭和五年同全書刊行會
 - 四、永平廣錄 道元禪師全集ノ内 昭和五年大久保道舟編 春 秋 社
- 以上のやうに明治大正昭和の僅か廿六年間に四回も廣錄の出版されたことは甚だ偉觀といふべきである。

七 廣略兩錄の參考書

永平廣錄全部に對する參考書といふものは極めて尠い。寫本として漸く二本存するのみである。

永平廣錄鈔(一名聞解) 上中下 玄鈿斧山著

これは一般に聞解と呼ぶところからして面山和尚の著といはれてゐるが、玄鈿は面山門下だから面山和尚の

指導は勿論受けたのであらうけれども玄鋤の著とする方が正しい。年代は不明である。

永平廣錄點茶湯 十卷 本光瞎道著

點茶湯といふ文字は正法眼藏佛性卷に「姓は是也何也、これを蒿湯にも點ず、茶湯にも點ず、家常の茶飯ともするなり」とあるところより名けたものらしい。著作年代は其の卷首に「寶曆十二年壬午ノ夏ヨリマタ大龍山ニテコレヲ自校訂ス。カノ壬戌ヨリ二十一年ヲ過來セルモノカ云々」とある。寶曆十二年壬午（二四二二）より前の壬戌の年は寛保二年（二四〇二）であつて、正に二十一年前である。第一卷の卷末に左の文が載つて居る。

寛保二年壬戌六月二十四烏述而應大察侍者之參控者屹在上之大龍山下更述閣筆偈曰轉疎轉遠諸佛火燄鉢口盆向日青天老婆切心語果自然白汗浹背更聞空蟬錯々自它已今鼻孔誰穿

武野沙門本光老人參

信陽鷲湖沙門 大乘謹寫

以上の二本は共に寫本なるが故に廣く世に行れてゐないので、手に入れることは容易でない。駒大圖書館では點茶湯を昭和二年十月可睡齋秋野孝道師より借り寫して館外不出の珍本として秘藏してゐる。此の外に

永平廣錄事考 二卷 面山和尚著

永平廣錄操持鈔 一卷 不詳

の二書が寫本で傳つてゐるといふことだが未だ眼に觸れる機會に恵れない。大方の諸賢にして若し發見し或は所持せられるならば宗門に寄與するの大精神を以つてどうか駒大圖書館までお知らせが願ひ度い。

次に略録に關する研究書であるが、これは廣録に比してやゝ多い方である。

永平錄雋原 一卷 梅峰竺信著

天和三癸亥（二三四三）歲吉日、三條通菱屋町ぬ屋林傳左衛門尉版行と奥附があつて、序文に「辛酉臘八書」として梅峰と竺信と二個の落款がある。依つて辛酉は天和元年（二三四一）であることが知られる。此の書は漢文の註で主として語句の典據出處を列擧したもので、後世冠註本の基を爲してゐる。

永平語錄擊節 三卷 德巖養存著

奥附には元祿八乙亥（二三五五）歲孟春穀旦、出雲寺和泉掾とあり、德巖の序文に「元祿龍集庚午（三年、二三五〇）仲春穀旦、讚陽龜山德巖沙門養存題」とある。内容は雋原と同一型であつて漢文を以つて故事典據をやゝ詳しく出してゐる位の相違である。

新刻元古佛錄 定盤星 一冊 太淳編

これは永平語錄の傳來の章に已に述べておいたが、以上の二書が餘り長きに失するから此の二者を撮略して間々見聞を加へたといふところの冠註本である。元文元年（二三九六）後數年にして出版されたものらしく察せられる。

永平語錄標指鈔 四卷 著者不明

駒大圖書館所藏の寫本は元享利貞の四冊となつてゐて、元享の二冊は昭和二年十月京都府山科町永興寺村上素道氏所藏のものを借り寫し、利の冊は昭和十年四月岡崎市寶福寺藏のもの、貞の冊は昭和二年十一月大本山永平寺藏のものを借り寫したことが記されてある。著者及び著作年代は不明であるが、假名交り文の註釋書として是最初のものである。此の外に、

永祖略錄蛇足 一冊 ?

永平語錄桂師辨 一冊 天桂 ?

永平元禪師語錄抄一冊 明曆三年 京都 林傳左衛門

の三書は書目にはあるが不幸にして未入手であるから是非大方の御檢出をお願いし度い。

以上廣略兩本の外に分本になつたものが若干あるから序でに此に掲げておく。

永平元和尙頌古 二卷 文政十年丁亥(二四八七) 祖宗編 茨城 天女山

標註 永平元和尙頌古 一卷 明治十六年 林 古芳註 森江佐七

永平承陽大師頌古聞解 一卷 鋤 斧 著 明治十六年 長木榮次郎

永平元和尙頌古 合縮藏霜帙八ノ内 明治十八年 弘教書院

以上の内聞解を除く他の三本は参考書では無いが、別に收めるところが無いから併せて此に加へたのである。

頌古や偈頌の抜抄などは多數あるけれども煩しいから省いておく。

要するに永平廣錄に對する研究が未だ一向に開かれてゐないことは是れに依つても明らかに知られる。正法眼藏と相並んで永平廣錄の研究も共に大いに開拓されねばならぬといふ所以である。

八 永平廣錄十卷の内容概観(上)

永平廣錄は編集の當初より十卷といふ數を以つてせられたことは既に述べたところである。それが天和元年本に於いて二卷宛併せて五冊本となつて現はれてはゐるが其の内容には何等の變りはない。今延寶元年本に依つて十卷に集録されてある内容を列記すれば左の如くである。

(一) 開關初住本京宇治縣興聖寺語錄卷第一 侍者 詮慧 編

この第一卷は即ち興聖寺語錄であつて、嘉禎二年丙申(一八九六)十月十五日高祖三十七歳、興聖寺開堂の際に於ける祝聖罷の上堂を最初として、寛元二年甲辰(一九〇四)七月以前に至る、前後九年間の上堂語を収録したもので、上堂數百二十三回に及んでゐる。輪王寺本は第一卷の卷尾に「上堂數三十四并頌古四十五首」と記載してゐる。この頌古といふのも上堂語としての頌であるから其の計七十九となるが故に延寶本よりは四十回も少いことになる。

(二) 開關次住越州吉祥山大佛寺語錄第二 侍者 懷昇 編

第二卷は大佛寺時代の上堂語五十二則と、永平寺と改稱後の所謂永平寺語録八則とを収録したものである。巻首の編者の記に「師於寛元二年甲辰七月十八日二徙于當山二明年乙巳四方學侶雲集座下」とあるから、大佛寺時代の上堂は寛元三年乙巳（一九〇五）から、翌寛元四年丙午六月十四日までの間であつて其の間に五十二回といふ多數の上堂があつた譯である。大佛寺を永平寺と改稱せられた時の上堂には「改大佛寺二稱永平寺」上堂寛元四年丙午六月十五日天有道以高清、乃至天上天下、當處永平」と明記してあるが故に、此れを永平寺上堂の第一として數へて、此の巻に八回の上堂語が收められてある。大佛寺永平寺を併せれば第二卷には六十回の上堂語が載つてゐることになる。輪王寺本の巻尾に「二卷分上堂五十九頌古十首」とある。計に於いて九回此の方が多くなつてゐる。

(三) 永平寺語録卷第三

侍者 懷井 編

第三卷より第七卷に至る五卷は全部永平寺語録であつて上堂語のみである。此の巻には上堂語七十二則を收めてゐる。輪王寺本には上堂七十一頌十三首と記してある。

(四) 永平寺語録卷第四

侍者 懷井 編

永平寺上堂語八十七則が收めてある。輪王寺本は上堂八十七頌古二十二首といふ。

(五) 永平寺語録卷第五

侍者 義演 編

永平寺上堂語六十七則を收む。輪王寺本には上堂六十八頌三十二首とある。

(六) 永平寺語錄卷第六

侍者 義演 編

永平寺上堂語五十七則を收む。輪王寺本には上堂五十七頌二十一首とある。

(七) 永平寺語錄卷第七

侍者 義演 編

永平寺上堂語七十一則を收む。輪王寺本には上堂六十頌三十二首とある。

以上七卷は高祖の三十七歳、嘉禎二年から五十四歳御入滅の建長五年に至る、前後十八年間、その内、興聖寺時代九年間に百二十三回、大佛寺時代一年半の間に五十二回、永平寺時代約十一年間に計三百六十二回の上堂が行はれたことになる。故に三處を合すれば五百三十七回の上堂説法があつて此の七卷中に此れだけの上堂語が収録されてあるのである。以上述べたところを圖表すれば左の如し。

本 寺・種	延 寶 元 年 本			輪 王 寺 本	
	興聖寺	大佛寺	永平寺	上堂	頌古
卷一	一二三			三四	四五
卷二		五二	八	五九	一〇
卷三			七二	七一	一三
卷四			八七	八七	一三二

總計	計	卷七	卷六	卷五
(五三七)	一一三			
	五二			
	三六二	七一	五七	六七
	四三六	六〇	五七	六八
(六一一)	一七五	三二	二二	三二

九 永平廣錄十卷の内容概観 (中)

第一卷から第七卷までは上堂語のみを収録したものであるから、前章に於いて一括して之を述べておいたが、第八卷以下の三卷は上堂語以外の有らゆる語録が網羅せられてゐる。

(八) 永平寺語録卷第八

侍者 懷昇等編

先づ初めに小參語二十章を収め、次に法語十三章、最後に普勸坐禪儀と坐禪箴とを載せてある。小參語二十章の内、結夏六、解夏五、冬至四、除夜五で、排列の順序は、

- | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 解夏 | 2 除夜 | 3 結夏 | 4 冬至 | 5 除夜 | 6 結夏 | 7 解夏 | 8 結夏 | 9 冬至 | 10 除夜 | 11 結夏 |
| 12 解夏 | 13 冬至 | 14 除夜 | 15 結夏 | 16 解夏 | 17 冬至 | 18 除夜 | 19 結夏 | 20 解夏 | | |

順	法語冒頭語	對機	曆年
一	浮生名利只在刹那	遠州巖室寺 圓智上人	
二	大道本無名字	女流了然 道者	
三	敎家道是法不可示	儒林學士大宰 府野公太夫	甲午冬(文曆元)
四	出家兒參禪之様子	惠運直歲 充職	延應二年五 月廿五日
五	時告直歲等匠人脱襪不笠	顯慧禪人(淨司) 離郷辭親	仁治二年辛丑
六	自合古來佛祖之行履		
七	諸佛如來一大事		
八	鐵牛也所駕也	(了)然公	

であつて恐らく小參の年代順であらうけれども、其の曆年を推し量る資料は此の中から求めることは不可能であるが、只5除夜以下に永平又は吉祥の語のあるもの十二章を數ふるが故に少くとも其の大半は永平寺に於ける小參であらうことを推するに難くない。

法語十三章は多く個人に書いて示されたものゝやうであるが、其の人と年代とが略々知り得られるものを左に列擧する。

九	近世學道之人		
一〇	全體本然誰逗ニ處所一		
一一	諸佛大道深妙不可思議	(了)然道者	
一二	幼歲從レ師者上古之勝躅	行玄禪人 十四歲	
一三	相將學道訪レ師爲レ先	士太夫	

(空欄は不明也)

普勸坐禪儀は觀音導利興聖寶林寺沙門道元撰といふ撰號を記載し、例の嘉祿三年(一八八七)撰のものを掲げ、坐禪箴は「慕ニ宏智禪師坐禪箴ニ而作ニ此箴」といふ、興聖寶林寺に於ける仁治三年壬寅(一九〇二)三月十八日撰の正法眼藏坐禪箴の卷に載せてあるものを其のまゝに掲げてある。輪王寺本には此の坐禪箴が載つてゐない。

(九) 永平寺語錄卷第九

侍者 詮慧等編

此の一卷は全部頌古を載せてゐる。古則を擧げて之に頌を附したもので本則の數からいへば九十則であるが頌を二首附けたものが十一則あるからして頌の數は百一首となる。輪王寺本が頌古百三首といつてゐるのは百一首の誤りでは無いかと思ふ。或は七言律が二首あるのを七言絶句として誤り數へたのかも知れない。

(一〇) 永平寺語錄卷第十

侍者 詮慧等編

眞贊 六首 自贊 廿一首

偈頌 百廿五首

内 在宋時代作 五十首 本朝作 七十五首

合計百五十二首の偈頌が収めてある。輪王寺本には左の廿六字が卷尾に載つてゐる。

佛十頌百廿五首
祖贊四自贊十九 合百四十八首都合二十四首

最後の都合二十四首の六字が何を意味するか筆者は解しかねて居る。百四十八首も百五十八首で無くてはなるまい。

一〇 永平廣錄十卷の内容概観 (下)

以上永平廣錄十卷の内容に就いて其の概観を述べたが第一卷から第七卷に至る上堂語については其の道場と回数とを記述したに過ぎない。故に以下上堂の形式に従つて上堂語の分類を試み度いと思ふ。三處(實は興聖寺、永平寺の二處なれども、大佛寺の名があるから三處と呼ぶことにする)に於ける五百三十七回の上堂の内、其の上堂の所由を明記したものが相當數に上つてゐるから先づ其れを大別して十類とする。(興)ハ興聖寺、(大)ハ大佛寺、(永)ハ永平寺。數字ハ回数

一、三佛會上堂(二十四回)

1	佛降誕會	四月八日	九回	(興)三	(大)一	(永)五
2	佛涅槃會	十二月十五日	七回	(興)一	(大)一	(永)五
3	佛成道會	十二月八日	八回	(興)一	(大)一	(永)六

二、年分行事上堂(二十四回)

1	結	夏四月十五日	七回	(興)二	(大)二	(永)三
2	解	夏七月十五日	八回	(興)一	(大)一	(永)四
3	開	爐十一月一日	八回	(興)三		(永)五
4	閉	爐十二月一日	一回			(永)一

三、節會上堂(二十六回)

1	聖	節 寶治二年? 天申節	一回			(永)一
2	正	元 正月朔日	七回	(興)四	(大)一	(永)四
3	端	午 五月五日 天中節	四回		(大)一	(永)三
4	中	秋 八月十五日	九回	(興)三		(永)六
5	冬	至 極月	四回	(興)一	日(大)一	(永)二

四、隨時上堂(二十三回)

1	正	月	十	日		一回		(永)一
2	正	月	十五	日		三回		(永)三
3	三	月	廿	日		一回	(大)一	
4	四	月	廿五	日		二回		(永)二
5	五	月	一	日		一回		(永)一
6	六	月	一	日		一回		(永)一
7	八	月	一	日	天中節	二回		(永)一
8	九	月	一	日		六回		(永)六
9	十	月	十五	日	嘉禎二年	一回	(興)一	
10	十二	月	十	日		一回		(永)一
11	十二	月	廿五	日		一回		(永)一
12	雪	朝	因	雪		三回	(興)一	(永)二

五、報恩上堂(十五回)

1	天	童	忌	十七日	七回		(永)七
---	---	---	---	-----	----	--	------

永平廣錄研究の序説

六、請謝知事頭首上堂(十七回)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	5	4	3	2
請	請	謝	謝	謝	請	謝	請	謝	請	源	先	佛	千
書	首	新	維	典	典	新	監	監	監	亞	妣	樹	光
記	座	舊	那	座	座	舊	寺	寺	寺	相	忌	忌	忌
		維	知			監	典	寺			十二月	廿七日	五月
		那	容			寺	座	座				七日	七日
		座				座							日
二回	一回	一回	二回	一回	三回	一回	一回	二回	一回	二回	二回	二回	二回
(永)二	(永)一	(永)一	(永)二	(大)一	(永)三	(永)一	(大)一	(大)一	(永)一	(永)二	(永)二	(永)二	(永)二

11 請藏主 一回 (永)一

12 請知容 一回 (大)一

七、爲亡僧上堂(三回)

1 爲亡僧慧顛 (興)一

2 爲亡僧僧海首座 (興)二

八、請回向上堂(四回)

1 惠信比丘尼爲先考請 一回 (大)一

2 懷鑒首座爲先師覺晏道人請 一回 (永)一

3 準書狀爲懷鑒上人請 一回 (永)一

4 比丘尼懷義爲先妣請 一回 (永)一

九、祝禱上堂(七回)

1 天童和尚語錄到 一回 (興)一

2 改大佛寺稱永平寺 一回 (永)一

3 自鎌倉歸山 一回 (永)一

4 雲州太守書寫大藏經 三回 (永)三

仁治三年
八月五日

寬元四年
六月十五日

寶治二年
三月十四日

建長二年

5 六月初十祈晴 建長二年? 一回

(永)一

一〇、不定時上堂

1	興	聖	寺	九十七回
2	大	佛	寺	三十七回
3	永	平	寺	二百六十一回

以上の分類は上堂語の内容即ち思想的內容に就いて分類したものでは無い、只上堂の形式的表面上の分類にしか過ぎないのである。然し形式に依つて大凡そ其の内容の一般を豫想し得るものも決して少くはない。

筆者は興聖、大佛、永平の三處に於ける上堂語は大體に於いて上堂の年月日順に編集せられたものゝやうに考へてゐる。それは上堂語中に年月日を明記したものもあるし、高祖の傳記或は歴史上から推定し得るものもある。其れ等を結びつけると其の中間の上堂の年代が大凡そ推定し得るものも少くない。此の論稿の中に其の點をも論及し度いと思つたが、餘りに多くの頁數を要するので、これは別の機會に改めて發表したいと思ふ。

一一 永平廣錄と永平家訓

永平廣錄十卷の思想內容の分類、若くは其の研究の發表されたものは未だ曾て見ないのである。只此に注目すべきものは面山和尚の永平家訓二卷である。永平家訓は瑞方面山和尚(二三四三―二四二九)が元文三年戊

午(二三九八)八月二十八日(序文)に永平廣錄中より一百廿五の祖語を抜抄して一篇としたもので、其の標準は面山自から八章の名目を設けて其の意味に契當する祖語を廣錄中より抄出したのである。其の八章とは左の如くである。

- 第一發心出家訓……………八則
- 第二佛祖正宗訓……………九則
- 第三諦信因果訓……………七則
- 第四通達修證訓……………八則
- 第五揀辨邪見訓……………十三則
- 第六正傳三昧訓……………四十八則
- 第七格外玄旨訓……………二十二則
- 第八知恩報恩訓……………十則
- (永平廣錄中ノ語) 計 一百廿五則

此の八章の一百廿五則が永平廣錄十卷中より如何様に抄出せられてあるかを表示すれば左圖の通りである。

家訓	廣錄										
	一卷	二卷	三卷	四卷	五卷	六卷	七卷	八卷	九卷	十卷	計
一章			一		一	二	一	三			八
二章	一		二	一		一	三		一		九
三章					二	一	四				七
四章		一	一			一	四	一			八
五章				五	四	二	二				一三
六章	二	一	一	一七	七	一〇	六	四			四八
七章	九	八		二	一	一	一				二三
八章				二	二	二	四				一〇
計	一二	一〇	、五	二七	一七	二〇	二五	八	一		一二五

面山和尚が永平家訓を編集した理由、及び八章の題目を設けて永平廣錄中の祖語を抄出した所以は具さに其の序文中に記述してある。

按スルニ祖偈云、西來祖道我傳東、釣月耕雲慕古風。所謂祖道古風者即是西天東地嫡嫡相承之面投面稟而祖師心證焉身行焉口說焉、貽諸兒孫欲令下證之修之說之、以光揚祖道聯續古風而永不墜地

也。是故諄諄家訓簡編成_レ套。泥_{ヨリ}以來四百八十餘禩、法身舍利光彩燦爛奪_ニ天下衲僧之眼睛_一。然而世衰道微稱_ニ兒孫_一者亦修證自_ラ綏多爲_ニ時風_一見_レ移而終至_レ不_レ守_ニ家訓森嚴_一也。非_ス可_レ憾乎。覃_{イテ}到_ニ今日_一則可_ニ推_レ胸痛哭_一者實不_レ少矣。

其の痛哭に堪へざる六箇條の痛根を擧げて後、

皆_ナ是_レ不_レ參_ニ熟_一家訓_一之罪也。故_ニ今_一采_下撫_{シテ}祖師爲_ニ孫謀_一要訓八章_一以_テ應_レ證_レ施_レ劑。只_ニ冀_一雲仍有_レ病者一_ニ瞑眩_一耳。

と家訓を編集せねばならぬ理由を述べてゐる。此の六種の病根を退治せんとする藥劑として八章の家訓を採摭したのであるから、應病與藥の精神を以て之を編集し大成したものであることは明瞭である。此の故に永平家訓の八章は決して永平廣録の思想的内容を分類せんとする學的意圖を以つて企てられたものでは無い。然しこれに依つて内容分類の示唆を得る點に於いて面山和尚の此の八章の命題は大いに後世に益するものがあつた。永平廣録は甚だ浩瀚であるからして繕讀すらも容易でない。然るに永平家訓は極めて手頃であるのと章が分けてあつて目やすがつけ易いので、簡略なる永平語録（略録）があるに拘らず、永平家訓が宗門に廣く行はれ大中小の學林及び叢林等の教科書としても用ひられてゐる。永平廣録の名を知らない者でも永平家訓ならば知つてゐるといふが如き現状である。現今最も世に廣く用ひられてゐるのは、

増冠
傍註 永平初祖家訓 上下二冊

である。僧冠傍註は翼龍童之を施して、明治十四年六月東京森江佐七、京都小川多左衛門兩書肆の出版すると

ころのものである。其の他にも、

- | | | | | | |
|---|--------|---|-----------|-------|-----------|
| 1 | 永平家訓 | 一 | 元文四年 | 京都 | 柳 枝 軒 |
| 2 | 永平家訓 | 一 | 延享元年 | 京都 | 風月勝左衛門 |
| 3 | 冠註永平家訓 | 一 | 能仁義
道註 | 明治十三年 | 京都 出雲寺文治郎 |
| 4 | 永平家訓典義 | 一 | | | |

等がある。

一一 結 語

以上述ぶるところは僅に永平廣録の成立、傳來、出版、參考書、形式的分類等を考へ、並に永平家訓に依つて内容分類の示唆を與へたに過ぎない。格別新らしく且つ深い研究でも何でも無いけれども、これだけのことも知つて置くことが今後永平廣録の研究に手を著けんとする人の爲に聊かでも手引となれば結構だといふ意圖の下に記述したのである。これを機縁として今後永平廣録の研究者が續々輩出して、有らゆる角度から參究し究明して、恰も正法眼藏の研究が一時蘭菊の美を競ふたやうに、永平廣録の研究を盛大ならしめ、語録に非ざれば到底味ひ得られざる語録の持味を發揚して愈々道元禪師の宗風を天下に流布し、聖化太平、興聖護國の精神を旺盛ならしめ度いといふことを念願して筆を擱くことにする。